「自由の国」最古の名門が ザ・シンフォニーホールに20年ぶり凱旋！

1842年に創立したアメリカ最古のオーケストラ、ニューヨーク・フィルハーモニック。当初から名門オーケストラの名をほしいままにし、マーラーやトスカニーニ、バーンスタインらがポストについて黄金時代を築きました。現在の音楽監督はアメリカと日本の両方の血を持つ若きサラブレッド、アラン・ギルバート。アメリカの中心都市にある楽団にふさわしく、プレーヤー一人ひとりは凄腕が揃い、エネルギーとバイタリティに溢れるサウンドを響かせます。

ギルバートが音楽監督に就任した2009年の秋、このコンビとしては初めての来日を果たし、すっかり若返ったモダンな響きを披露してくれました。そして2014年2月、5年目のコンビが再び来日します。NYPがザ・シンフォニーホールに登場するのは実に20年ぶり！ もちろん、このコンビでは初見参！ そうなれば、ファンの期待もますます高まるでしょう。

ギルバートの誠意と創意で、全米でも最も安定したパフォーマンスで魅せるNYPが、大阪公演では日本が世界に誇るジャズ・ピアニスト、小曽根真をソリストに迎え、より痛快な演奏を披露してくれること必至。30余年の時を経て、歴史と文化に彩られた殿堂「ザ・シンフォニーホール」と彼らが共鳴するとき、どんな響きがホールを包み込むのでしょう。未知なる"残響"との出会いに立ち会わないわけにはいきません！

Message from Alan Gilbert

「就任から4年を経て」

——アラン・ギルバート

©Chris Lee

私がニューヨーク・フィルの音楽監督になることが決まったとき、こんなことは夢見ることすら気が引けてしまうくらい、本当に夢みたいなことが起こったと思いました。ニューヨーク・フィルは、間違いなく世界のトップクラスのオーケストラですが、私にとってはそれだけの存在ではありません。私の両親はふたりともニューヨーク・フィルのヴァイオリニストでしたので、子供の頃からツアーにも同行していましたし、オーケストラはいつも身近な存在でした。このオーケストラは、私にとってまさにファミリーそのものなのです。そんな中で、ニューヨーク・フィルは、オーケストラとは何たるかを私に教えてくれました。

この4年間、ニューヨーク・フィルとは数々の海外ツアーを共にし、ベトナムへのデビューも果たしました。また、リゲティのオペラ「ル・グラン・マカーブル」やシュトックハウゼンの空間音楽「グルッペン」など、包括的かつ多角的なプログラムにも挑戦してきました。さらに、新たな音楽シリーズの立ち上げや、新作への取り組みなど、オーケストラとこれらの経験を共にする中で、ひとつひとつコンサートを行うごとに関係が深まる手応えを感じています。コンサートでは毎回、まるで魔法のような何かが生まれるのを感じるのです。これまでの4年間を振り返ると、まるで壮大な冒険だったように思います。オーケストラの素晴らしい音楽家たちとは、強い絆が生まれていますし、このオーケストラとだったら、ニューヨークのみならず世界中で成功できると確信しています。また、ニューヨークの文化生活において、このニューヨーク・フィルが中心的な役割を果たしていると実感できることも大きな喜びです。

音楽監督としての任期を2017年まで延長しましたが、オーケストラがよい方向へ向かっているのを感じる今、今後さらに発展するニューヨーク・フィルと、どんなエキサイティングな"旅"が待っているのか楽しみでなりません。最後に、オーケストラのメンバーたち、スタッフ、観客の皆さんなど、各方面からの温かいサポートに心から感謝します。

NYP

アラン・ギルバート 指揮
ニューヨーク・フィルハーモニック
ピアノ：小曽根 真

©Chris Lee

2014. 2/10（月）7:00PM

ブリテン：青少年のための管弦楽入門
ガーシュウィン：ラプソディ・イン・ブルー（P/小曽根 真）
チャイコフスキー：交響曲第5番 ホ短調 op.64

S ¥28,000　A ¥24,000　B ¥19,000　C ¥14,000　プラチナ ¥34,000

主催：KAJIMOTO／ザ・シンフォニーホール／朝日放送　後援：アメリカ合衆国大使館
お問い合せ：ABCチケットセンター 06-6453-6000

アラン・ギルバート

NY生まれ。幼いころから、アメリカ人の父と日本人の母にヴァイオリンを習う。ハーバード大学、カーティス音楽院、ジュリアード音楽院などで学んだ後、フィラデルフィア管弦楽団での補欠ヴァイオリニスト、クリーヴランド管弦楽団での副指揮者、サンタフェオペラでの初代音楽監督などを歴任し、2009年に生粋のニューヨーカーとして史上初めてNYPの音楽監督に就任した。以降、新鮮かつ革新的な仕事ぶりで注目されている。NYPのほか、ボルティモア交響楽団、ボストン交響楽団、シカゴ交響楽団など欧米のトップ・オーケストラとも定期的に共演。また、日本国内でも活動の幅を広げ、NHK交響楽団や東京都交響楽団などに客演している。

ニューヨーク・フィルハーモニック

1842年創立。アメリカで最も長い歴史をもつ。現在、年間約180公演を行い、2010年5月5日は世界的にも類を見ない15,000回目の記念すべき公演を行った。音楽監督には、1958年に就任し、69年に終身桂冠指揮者となったレナード・バーンスタインをはじめ、エール・ブーレーズ、ズービン・メータ、クルト・マズア、ロリン・マゼールら20世紀を代表する音楽家が名を連ね、2009年9月からはアラン・ギルバートが務めている。創立当初から、ドヴォルザーク「新世界より」やラフマニノフのピアノ協奏曲第3番など、多くの重要作品を世界初演する一方、その時代の新しい音楽にも積極的に取り組んでいる。過去一世紀の間に世界的にも有名になり、5大陸の61カ国431都市で公演を実施。メディアでも活躍するほか、NYPプロデュースのコンサートも継続している。

NYフィルと初共演する
天才ジャズピアニストに迫る！

［インタビュー］
小曽根 真

世界を股に掛けて活躍するジャズピアニスト・小曽根真。
多くのトップオーケストラとも共演を果たし、
クラシックファンにもその名を轟かす彼が、
今回、NYPと初共演を果たす。
どんな美しい協和音が奏でられるのか…。
その意気込みを聞いた。

OZONE
MAKOTO

©Tsutomu Yabuuchi (Cracker Studio)

小曽根 真

神戸生まれのジャズ・ピアニスト。幼少のころから父の影響でジャズに興味を持ち始め、独学で音楽を始める。1980年に渡米し、1983年ボストン・バークリー音楽大学ジャズ作曲・編曲科を首席で卒業。米CBSと日本人初の専属契約を結び、デビュー作「OZONE」を発表する。一時帰国し、国内での活動後、1999年にふたたびNYに移住。世界を股に掛けて演奏活動を行っている。トップオーケストラとの共演も多く、デュトワ、尾高忠明、井上道義、大植英次らの指揮でモーツァルト、ガーシュウィン、バーンスタイン、ショスタコーヴィチなどの協奏曲を演奏している。また、現在は作曲やラジオのパーソナリティ、テレビ出演、舞台演出など活動範囲も多岐にわたっている。

“バンド”になれる瞬間を肌で感じたい——
INTERVIEW

——これまで、ジャズピアニストとして、多くのバンドやオーケストラと共演されています。小曽根さんにとってセッションの魅力とは?

他の何にも代えようのない楽しさですね。メンバーとつながっている感覚が堪らないです。ジャズの場合、基本的に即興ですから、相手を見ていないと演奏が出来ないのです。さもないと、大事故が起こってしまう。だから、リハーサルに入る「初めまして」の瞬間からどれだけオープンになって、コミュニケーションを取れるかが重要になります。

もちろん、クラシックはマエストロが絶対的な存在ですが、それ以上に一緒に音を奏でる人たちとステージで“どれだけ愛し合えるか?”が僕の最重要ポイントです。そのために、僕は毎回、コンチェルトのスコアをパソコンに全部打ち込んで、オケのパートを全て頭に入れてから音合わせに臨んでいます。それぞれのパートを把握出来ていれば、僕自身もスムーズに弾き出せるんです。以前、「知っている曲だから」と覚えずにいたら、予期しないところでオーボエの音が聞こえてきて、それに気を取られて自分のパートが弾けなくなってしまいました。それは良くないなと、必ずこの作業を行なうようにしています。そうすると、オケのメンバーと目で合図しながら演奏出来るので、お互いが「つながっている感」を持てるのです。

——NYフィルとは初めての共演になりますね?

実は、僕が本格的にクラシックと向き合い始めてからそろそろ10年になります。そういう節目に共演させていただけることは、とても名誉なことです。でも、怖いです!「逃げたい!」という気持ちと、反対に「早く演りたい!」という気持ちの両方ですね。

オケのメンバーとはつながり合い、アラン(・ギルバート)さんには贅沢に、そして自由奔放に僕らを振り回していただいて、その度に驚きを感じながら演奏していけたら良いですね。ジャズの言葉で言う「バンド」になりたいです。ゴムバンド(gum band)から来ている言葉ですが、黒人のミュージシャンが「This is a band!」って言ったら、最高の褒め言葉なんですよ。本当にユニティー(Unity)になっているという。そんないい“バンド”になれたら最高ですね。その分、僕も頑張らなくてはいけませんが…。

——今回演奏されるのは、小曽根さんの代名詞ともなっている、ガーシュウィンの「ラプソディ・イン・ブルー」です!

ありがたいことに、最近は演奏する機会がたくさんあるのでそう言われる事もありますが、こんな素敵なチャンスをいただいたので、もう一度、全部ばらして組み立て直そうと思っています。初めて演奏するつもりで指頭からきちんと組み立て直していこうと思っています。もう弾ける曲だから苦痛な練習にはなるでしょうけれど、それが、NYフィルのメンバーとアランさんに対する、僕が払う一番の敬意だと思いますから。僕が出した音で彼らの耳を納得させることが出来たら、きっと返ってくるエネルギーもものすごいでしょうね。それを僕が「堪らない!」と感じれば、即興部分で何が出てくるかわかりません(笑)。まずは僕が最高の敬意を表す演奏をして響き合っていきたいです。

僕の「ラプソディ・…」を気に入ってもらえたら、ジャズピアニストとして、アランさんやNYフィルのメンバーと一緒に演奏したい曲があります。ガーシュウィンの「コンチェルト・イン・F」と、僕が死ぬまでに絶対レコーディングしたいと思っている、バーンスタインの「不安の時代」。夢を持って動みます!

——他のホールにはない、ザ・シンフォニーホールの魅力とは?

「温かさ」でしょうか。1700席という客席数とスクエアに近いホールの形がお客さんと演奏者の距離を縮めていて、アットホームですよね。出した音のエネルギーが「パーン」と、一瞬で劇場を埋め尽くす感覚も素晴らしいです。

それに、ザ・シンフォニーホールにいる音楽の神様も、“大阪のおっちゃん”のようにすごく温かそうです。「おう、おかえり。ま、ゆっくり弾いてけや」って(笑)。その代わり、いい加減に弾くと「コラッ! ちゃんと練習して来なあかんやないか、アホ!」って怒られそうな感じもしますけど(笑)。ミュージシャンとして、このホールで演奏出来るのは光栄なことです。だから緊張もするし、逆に良い緊張は必要だと思う。とにかく、練習を早く始めます!

——来年2月を楽しみにしているお客さんに向けてメッセージを!

ありきたりだけれど、精一杯幸せな音楽を作って、皆さんに幸せな空間をお届けしたいと思っています。舞台に出るまでは緊張するんですよ。でも、じたばたとしても仕方ないですし、襟を締め直して舞台に一歩踏み出します。その時に、お客さんがくださる拍手はこの上ないパワーです。そして、最初のコミュニケーションでもあり、僕自身がリラックスすることも出来るのです。ですから、その温かい拍手に対して、「ありがとう」という気持ちを幸せなパワーに代えて、お返し出来るように演奏したいと思います。